

郷古墓発掘調査報告書

1989

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

郷古墓発掘調査報告書 正誤表

頁・行	誤	正
7・3	平面形が周間に制約されていることや	平面形は不整形で、周囲の水田によって範囲が制約を受けていると考えられることや
8・18	本古墓の	本墓壇の
8・22	本古墓の	本墓壇の
8・30	本古墓の	本墓壇の
10・2	平面ラシは	平面形は
11・2	本古墓の	本墓壇の
11・第8回	(SK13の土層説明) 岩化物を含む	炭化物を含む
12・8	本古墓は	本墓壇内には
12・16	棺材の腐食	棺材の腐朽

郷古墓発掘調査報告書

1989

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

- 1 本書は、昭和63(1988)年9月12日から10月14日にかけて実施した三次市有原町の県営ほ場整備事業（川西地区）に係る郷古墓の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、文化庁から国庫補助金を受けた広島県立埋蔵文化財センターと、広島県三次農林事務所から委託を受けた財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 調査は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員の谷岡誠司・太田史代と広島県立埋蔵文化財センター指導主事の西村直城が行い、整理は谷岡が担当した。
- 4 本書は、西村（Ⅰ・Ⅱ）、谷岡（Ⅲ～Ⅵ）が執筆し、谷岡が編集した。
- 5 本書に使用した造構の表示は、SK：埋葬施設である。
- 6 図版と挿図の遺物番号は同一である。
- 7 本書に用いた方位は、すべて磁北である。
- 8 第1図は、建設省国土地理院発行の1:50,000の地形図（三次）を使用した。

目　　次

I はじめ	(1)
II 位置と環境	(2)
III 調査の概要	(4)
IV 遺構	(5)
V 遺物	(13)
VI まとめ	(17)

挿図目次

第1図	周辺主要遺跡分布図 (1:50,000).....	(3)
第2図	周辺地形図 (1:1,500).....	(4)
第3図	積石基壇実測図 (1:60)	(5)
第4図	擲古墓断面図 (1:60)	(6)
第5図	土壙墓配置図 (1:80)	(7)
第6図	土壙墓実測図(1) (1:40)	(9)
第7図	土壙墓実測図(2) (1:30)	(10)
第8図	土壙墓実測図(3) (1:40)	(11)
第9図	出土土器実測図 (1:3)	(14)
第10図	出土錢拓影 (1:1)	(15)
第11図	出土鉄器・銅製品実測図 (1:2)	(15)
第12図	出土石器実測図 (2:3)	(15)

図版目次

図版 1 a	遺跡遠景 (南東から)	図版 5 d	S K 6 (北西から)
b	遺跡近景 (南西から)	e	S K 9 (西から)
図版 2 a	積石基壇全景 (南西から)	f	S K12 (東から)
b	積石基壇断面 (南西から)	図版 6 a	S K13墓標石 (西から)
図版 3 a	S K11~14完掘状況 (南から)	b	S K13墓標石除去後 (西から)
b	調査区完掘後全景 (南西から)	c	S K13完掘状況 (西から)
図版 4 a	S K 1検出状況 (東から)	図版 7	出土遺物
b	S K 1完掘状況 (西から)		
図版 5 a	S K 2 (北西から)		
b	S K 3 (北西から)		
c	S K 5 (西から)		

I は じ め に

郷古墓の発掘調査は、広島県三次市有原町における県営ほ場整備事業（川西地区）に係るものである。同事業は、地区内の道路及び用排水路を完備し、耕地を整備するために、昭和63(1988)年度より開始されている。これに先立ち広島県三次農林事務所（以下「三次農林」という。）から、昭和61(1986)年4月、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）へ、事業予定地内の埋蔵文化財の有無及び取扱いについての協議があった。これを受けて県教委では予定地内の分布調査を実施し、郷古墓を確認した。県教委では三次農林と協議を重ねたが、予定地内の現状保存は困難であるとの結論に達したため、事前の発掘調査を行い、記録保存をすることとなり、昭和62(1987)年12月、三次農林から県教委に郷古墓の発掘調査の依頼があった。

発掘調査は、文化庁と農林省の協議に基づき文化庁から各都道府県教育委員会へ通知された「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」（昭和50年10月20日府保記第211号）により、経費の農家負担分に相当する部分（20%）については広島県立埋蔵文化財センター（以下「県立センター」という。）が、事業者負担分に相当する部分（80%）については財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「財団センター」という。）が行うことになった。調査は、県立センターが昭和63(1988)年9月12日から30日まで、財団センターが9月12日から10月14日まで行った。また、11月12日に文化財の広報普及活動の一環として、三次市教育委員会と共に調査報告会を開催した。

発掘調査にあたっては、地権者の林金一氏、広島県三次農林事務所、広島県立歴史民俗資料館、三次市教育委員会及び地元の方々から多大な御協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

Ⅱ 位置と環境

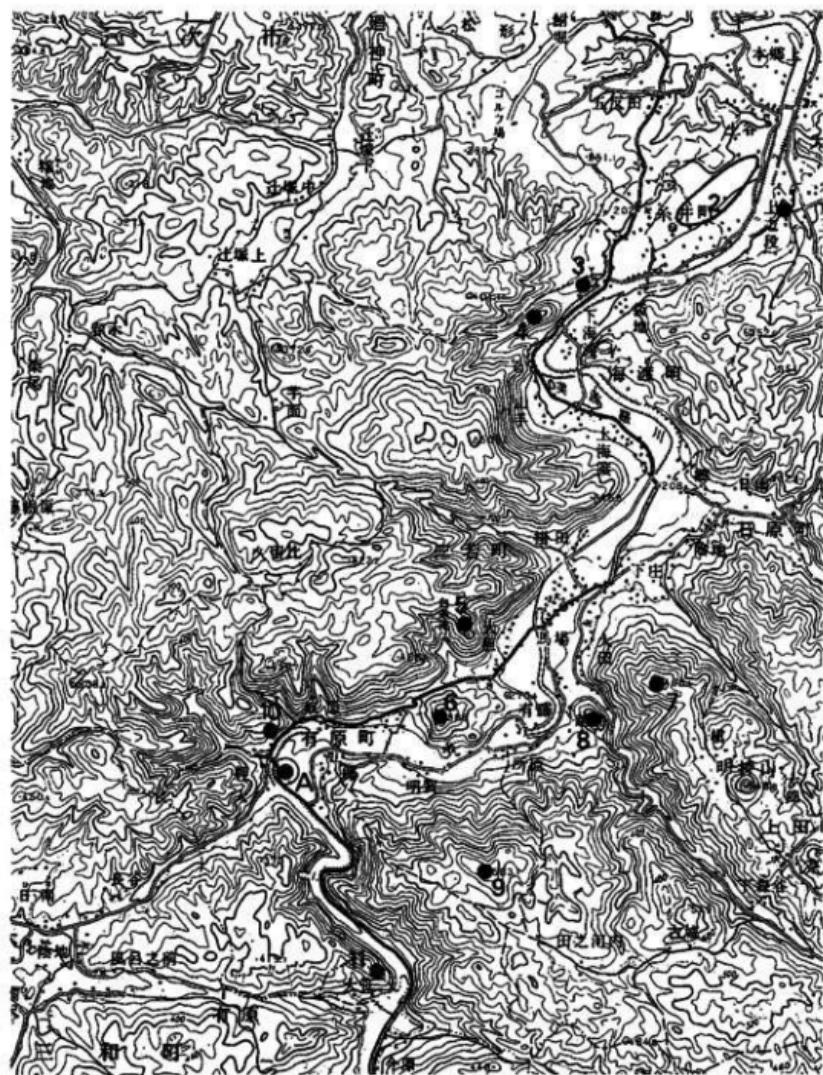
郷古墓が所在する三次市有原町は、双三郡三和町と境を接する三次市の南端にあり、美波羅川が山峠を抜けて形成する沖積地の始まる所である。中世には、この一帯は徳田荘と呼ばれていたが、その範囲及び実態は不明である。近世の有原村は、三和町有原を含んだ範囲である。文政8(1825)年に完成した『芸藩通志』によれば、石高367石余、「村内に平地多し」と記載される水田地帯であった。

徳田荘の北、現在の三次市三若町から向江田町にかけての地域は、中世には江田荘と呼ばれていた。江田荘を支配していた江田氏は、鎌倉時代初期に東国からこの地に入部した広沢氏の分流で、当初は向江田町に本拠を置いていたが、中世後期に江田荘の南端の三若町の旗返山城に本拠を移した。有原町には、江田氏の菩提寺といわれる長門寺があったことから、少なくとも江田氏が旗返山城に移った中世後期には、この一帯が江田氏の領域となっていたのであろう。長門寺跡には、江田氏一族の墓と伝えられる五輪塔や宝篋印塔が残っている。有原町の南端に位置する大笠山城跡は、江田氏と対峙する敷名氏の出城といわれ、美波羅川の沖積地とは山峠で隔てられており、このあたりが両者の領域の境界であったと思われる。有原町は、南の勢力と対峙する重要な位置にあったといえる。

旧江田荘内の美波羅川流域には、江田氏ゆかりの山城が多く存在する。江田氏の本城であった旗返山城跡の南隣の陣床山城跡は、天文22(1553)年に毛利元就が江田氏を滅ぼした時に、旗返山城攻略の陣を置いた所と伝えられる。江田氏滅亡の際に落城した城としては、他に高杉町の高杉城跡や志幸町の新宮山城跡がある。三若町の旗城跡、重宗城跡、大番城跡は、城主や城の由来は不明であるが、美波羅川を挟んで旗返山城跡と対応する位置にあり、旗返山城との関連が考えられる。糸井町の笠城山城跡は、江田氏に属する糸井氏の居城と伝えられる。山麓の土居館跡には、土壘や堀が残っており、平時における居館と思われる。大田幸町の上之段城跡も、文献に全く現れない。郭内には、五輪塔が残っている。上之段城跡の対岸には、中世末～近世の古墓である糸井古墓群がある。その他、現在では廃寺となっているが、江田氏が帰依していたといわれる寺がいくつか伝えられている。

註

- (1) 「芸藩通志」卷百十一
- (2) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「糸井古墓群発掘調査報告」昭和59(1984)年、広島県立埋蔵文化財センター「糸井第2号古墓発掘調査報告」昭和59(1984)年



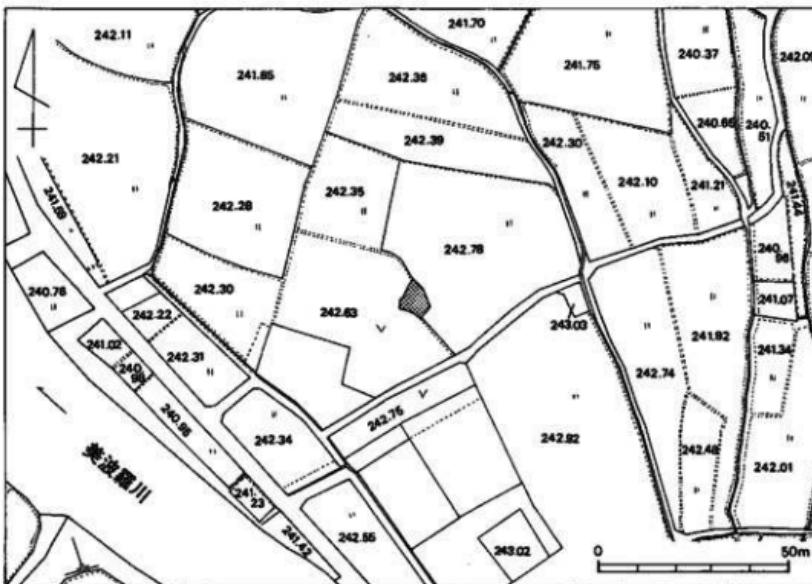
第1図　周辺主要遺跡分布図 (1:50,000)

- | | | | | |
|----------|-----------|----------|---------|----------|
| A. 磐古墓 | 1. 上之段城跡 | 2. 糸井古墓群 | 3. 土居館跡 | 4. 笠城山城跡 |
| 5. 旗返山城跡 | 6. 隅床山城跡 | 7. 重宗城跡 | 8. 大卷城跡 | 9. 旗城跡 |
| 10. 長門寺跡 | 11. 大椎山城跡 | | | |

III 調査の概要

郷古墓は北流する美波羅川の東岸に広がる沖積地の標高240m台の水田地帯に位置する。この水田地帯の中に、平面形が不整形な五角形を示す積石基壇がある。現状の規模は南北7.4m、東西6.4m、高さ約1mであった。基壇上の北西部には1基の墓碑が置かれていたが、下部構造は存在しなかった。墓碑は据え方が不安定であったことから後に移築したものと思われる。

調査は、まず基壇上の立木の伐採や表土剥ぎを行い、基壇の外形を検出することから開始した。その結果、基壇の東側は破壊を受けているが、北辺、北西辺、南西辺は、ほぼ完存しており、基壇内は円礫や自然石を積み上げていることがわかった。この積石基壇に十字の畦を残しながら掘り下げ、下部構造の検出を行った。約30cm掘り下げたところ、暗茶褐色土層上面で土墳墓4基を検出した。次いで基底面まで掘り下げると土墳墓10基が検出できた。遺物は暗褐色混疎土層より土師質土器・陶磁器・煙管が、土墳墓より青磁・土師質土器・古錢・鉄釘・骨片等が出土した。

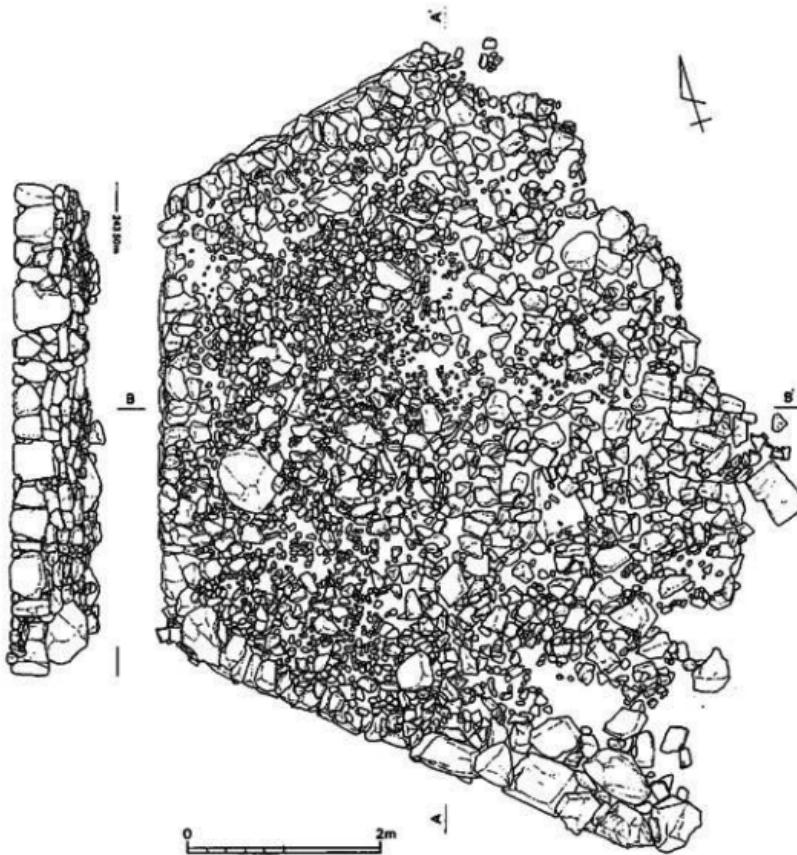


第2図 周辺地形図 (1 : 1,500) アミ目は調査区

IV 遺構

積石基壇（第3図、図版2）

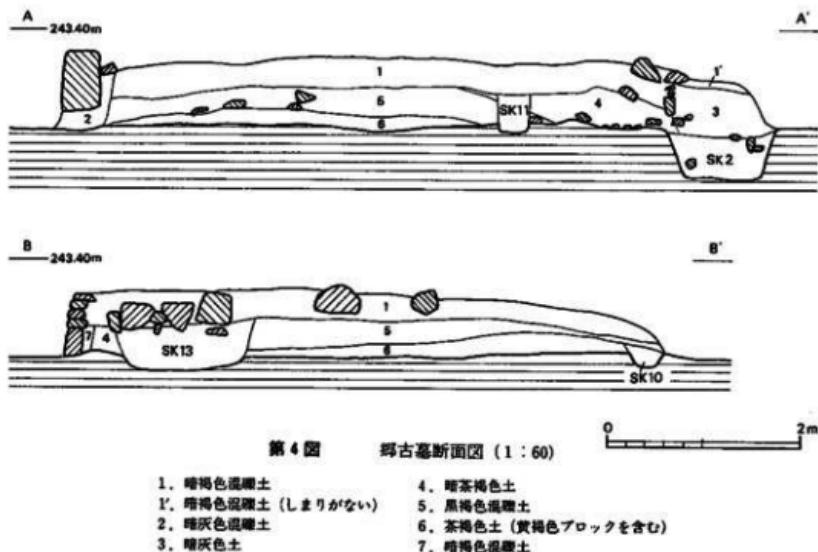
表土のすぐ下で積石基壇を検出した。平面形は不整形な五角形を示しているが、北東辺・南東辺は削平や破損を受けたり、崩れた縁辺部が積み直されていた。北辺・北西辺・南西辺の基壇縁辺部の遺存状況は良好である。その平面形は北辺と北南辺が 120° 、北西辺と南西辺が約 115° の角度で屈曲している。縁辺の基底部には40cm大の角張った自然石を縦長に据え



第3図 積石基壇実測図（1:60）

て、平坦面を外側に向けることにより面を揃えている。この大型の石の間には、やや小型の石を縦長に据えてあり、隙間に小型の礫を詰めている。さらに基底石の上には、25cm大の石を3~4段横手積み、あるいは小口積みにして、垂直に積み上げている。南西辺の南側の基底石には80cm大の扁平な大型の石を使用している。これらの基底石は他のそれよりも約18cm上のレベルに据えていることや、石の組み方が粗雑であることから積石基壇の構築後、さらに時期を経てつくられたものであると考えられる。

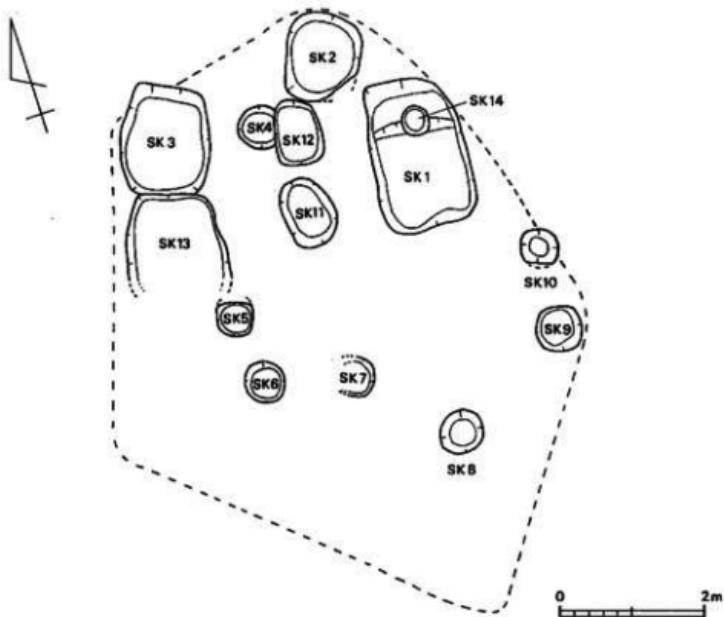
次に基壇内の構造について検討してみたい(第4図、図版2)。基壇上面には主として10~20cm大の礫を乱雑に積み上げている。この積石部は礫だけではなく、かなりの土が混じる暗褐色混礫土層である。所々に約80cm大の自然石もみられるが、石の配置や並び方に規則性は認められず、下部構造の検出を行ったが、これらの自然石に伴う遺構は検出できなかった。暗褐色混礫土層を約30cm掘り下げる、北半で暗茶褐色土層、南半で黒褐色混礫土層に到り、この暗茶褐色土層上面でSK11~14を検出した。黒褐色混礫土層の下層は茶褐色土層であり、この土層上面には10~30cm大の円礫や亜角礫が多く積まれている。その中でSK5の墓標石を検出した。基底面(茶褐色混礫土)まで掘り下げるSK1~10を検出したが、SK5と同じく茶褐色土層上面に墓標石をもつ土壙墓も他にあった可能性も考えられる。



以上のように本古墓は、数時期に分かれて埋葬施設を構築して墓を営んでいることがわかったが、積石基壇は埋葬施設の構築時には伴っていなかったと考えられる。つまり、積石基壇の平面形が周囲に制約されていることや土層観察から墓域の一部が削平や破壊を受けた後世に構築されたものと捉えたい。

土壙墓（第5図）

SK1（第6図、図版4）基壇内の北東部にあり、SK2の南東側に位置している。墓壇は基底面から掘り込まれており、平面形はやや不整形な長方形である。規模は長辺約2.0～2.15m、短辺約1.3m、深さ約50cmであり、長辺方位はN 7°Eである。底面は北部では緩やかに傾斜する段をなし、南部は平坦で、南北長約1.2m、東西長約1.1mの規模である。墓壇上部には10～25cm大の礫が南半部を中心として密集して置かれている。20～25cm大の大きい礫は集石の北側にのみ置かれていることは被葬者の頭位を意識している可能性もある。この集石は墓壇の平面形の範囲とほぼ一致するもので、本古墓の上部構造として蓋石や墓標石の機能を果たしていると考えられる。遺物は底面南部から20cm上で鐵釘が出土し



第5図 土壙墓配置図（1:80、破線は積石基壇の範囲）

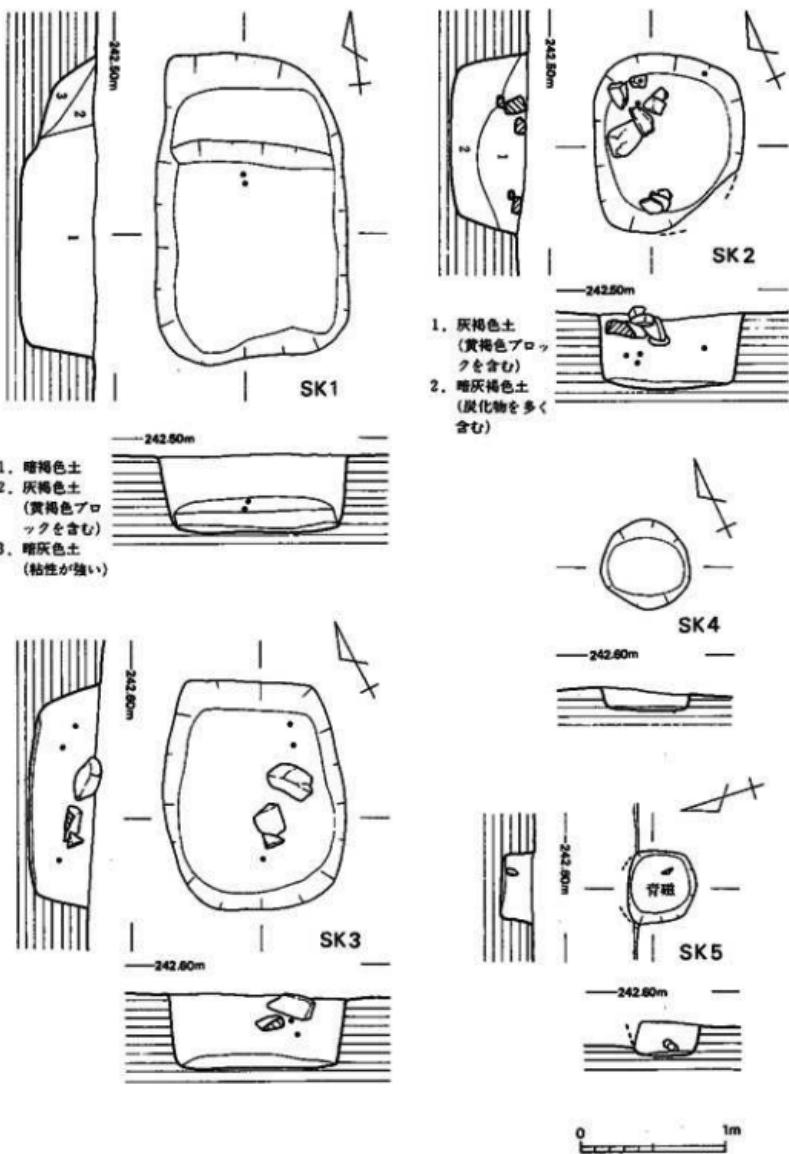
た。また、集石の中央部が落ち込んでいることや北部に裏込め土がみられることから底面南部に棺を埋置したと考えられる。

S K 2 (第6図、図版5a) 墓壙内の最北端部に位置する墓壙で、SK 1の北西側に位置する。平面形は隅角が明らかでないが、隅丸長方形と考えられ、規模は北東～南西長約1.25m、北西～南東長約1.2m、深さ約50cmである。主軸の方位はN32°Eである。埋土は下層が炭化物を多く含む暗灰褐色土で、上層は灰褐色土（黄褐色土ブロックを含む）で中央部が深く落ち込んでいる。墓壙の北隅と東隅で鉄釘が出土していることから、木棺による埋葬が行われたと考えられ、木棺の腐朽後に灰褐色土が落ち込んだと思われる。埋土上層には20～30cm大の石が墓壙内に入り込んでいるが、墓壙上面には同様な石が他にも存在していたと思われ、SK 1と同様に墓壙上部を集石で覆って墓標石の役割をしていたと考えられる。

S K 3 (第6図、図版5b) 墓壙内の北西にあり、SK 13の北側に位置する。平面形は隅丸長方形で、長辺約1.55m、短辺約1.25m、深さ約50cmの規模である。主軸方位はN28°Eである。SK 1・2と同様に基底面から掘り込んでおり、墓壙の南辺をSK 13によって切られている。墓壙の北東隅と南側から鉄釘が出土していることや、墓壙内に15～30cmの墓標石と思われる扁平な石が入り込んでいることから木棺を埋置したと考えられる。

S K 4 (第6図、図版3b) SK 3の東側、SK 2の南西側に位置する。SK 12の下部の基底面で検出しておらず、SK 12が構築される以前に本古墓が存在していたと考えられる。平面形はほぼ円形で規模は検出面で径62cm、深さ18cmである。底面は平坦で、平面形は北西～南東に長い梢円形である。埋土は暗褐色土である。本来の掘り込み面はかなり上部にあったと思われるが、土壙墓を検出した基底面（茶褐色混疊土）の上層には暗茶褐色土が盛り上げられていたので土層の判別が困難であった。また、SK 12を構築する段階で本古墓の上面を整地した可能性も考えられる。

S K 5 (第6図、図版5c) SK 6の北側に位置し、SK 13の南側に近接している。北辺は明らかではないが、平面形はほぼ隅丸方形であると思われる。検出面（基底面）で北西～南東長約50cm、南西～北東長（現存）45cm、深さ約25cmである。埋土は2層で上層が暗褐色土、下層が茶褐色土である。遺物は墓壙の中央やや東から青磁の破片が底面に立つような状態で出土した。その出土状況や遺物が破片であることから、この遺物が埋葬の際に供献したものかどうか疑問が残る。土壙墓の上部は約30×25×8cmの板状の石が墓壙を覆うような状況で置かれている（図版6）。本古墓の上部施設として蓋石や墓標の役割を果たしていると考えられる。また、この石は茶褐色土層上面にあることから、本来の土壙の



第6図 土壌基実測図 (1) (1 : 40, ●印は鉄釘)

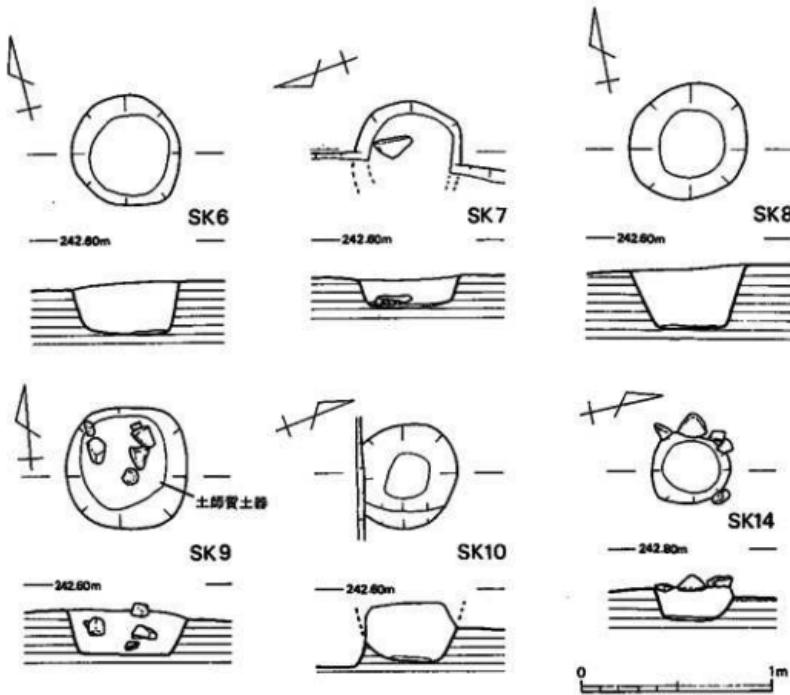
掘り込み面は、この茶褐色土層の上面であったと考える。

SK 6 (第7図、図版5 d) SK 5の南側、SK 7の西側に位置する。平面プランは円形で検出面で径約55~60cm、深さ27cmを測る。

SK 7 (第7図、図版3 b) 基壇下の中央部よりやや南側に位置する土壙墓である。平面形は、ほぼ円形を呈すると思われ、検出面で径約55cm、深さ15~18cmを測る。底面北側に20×10×5cmの石が落ち込んでいた。埋土は暗茶褐色土である。

SK 8 (第7図、図版3 b) 基壇下の南東部にあり、検出した14基の墓壙の中では最南端に位置する。平面形は円形で検出面で径約60cm、深さ約30cmを測る。埋土は暗茶褐色土(黄褐色ブロックを多く含む)である。

SK 9 (第7図、図版5 e) 北側にあるSK10と並んで基壇内の東端に位置する。平面形はやや不整形な隅丸方形である。検出面で一辺60~65cm、深さ23cmを測る。遺物は墓壙中央部の底面上3cmからほぼ完形の土師質土器小皿が出土した。埋土内には10~15cm大の



第7図 土壙墓実測図 (2) (1 : 30)

礫が数個入り込んでいるが、この土師質土器小皿は礫よりも下位の墓壙底面上で検出したことから本古墓に伴う遺物と考えられる。埋土は暗茶褐色土（炭化物、黄褐色土ブロックを含む）である。

SK10（第7図、図版3 b）SK1の南東側、SK9の北側に位置する。平面形は、ほぼ円形を示すと思われる。墓壙は茶褐色土層上で検出し、径約55cm、深さ18~30cmである。東側には緩やかに傾斜する三日月状の段を有する。埋土は暗褐色土（炭を含む）である。



第8図 土壙墓実測図(3)(1:40, ●印は鉄釘)

埋土中から少量の骨片が出土した。

S K11 (第8図、図版3a) 墓壙下の中央部やや北側に位置する。平面形は橢円形で検出面で長軸97cm、短軸60~70cm、深さ30~35cmである。主軸方位はN 9°Wである。底面は北側がやや高くなっている。

S K12 (第8図、図版5f) S K11の北側に位置し、平面形はやや不整形な長方形である。長辺方向はN12°Eである。規模は検出面で長軸90cm、短軸65cm、深さ30cmである。底面は、ほぼ平坦である。埋土は暗褐色土（上層）と炭化物を多く含む黒褐色土（下層）の2層に分かれる。鉄釘が出土していることなどから本古墓は木棺を埋納したと考えられる。

S K13 (第8図、図版6) 墓壙内の西側にあり、S K3の南側、S K11の西側に位置する。墓壙は、暗茶褐色土層上面から掘り込まれている。平面形は、南端が明らかではないが、隅丸長方形であると思われ、規模は現存で長辺約1.5m、短辺約1.2~1.4m、深さ47cmである。長辺方位はN10°Eである。遺物は底面北西部から鉄釘、南部から用途不明鉄器、古銭2枚（治平元年宝、永樂通宝）が重なって出土した。また北東部の底面上20cmのあたりで長さ45cm、幅30cm、厚さ10~15cmの範囲に炭化物が括がっていた。墓壙の規模や鉄釘の出土から木棺が使用されたと考えられる。底面上20cmの高さには10~20cmの小礫が入り込んでいる。これは棺材の腐食に伴う墓標石の落ち込みとも考えられるが、棺材を押えるため墓壙内に始めから埋置した石である可能性も考えられる。上部構造は本遺跡の土壙墓群の中ではしっかりした造りで独特の形態を示している。40~50cm大の角礫で方形に囲むように石を組み、その上へ60cm大の扁平な3個の自然石を蓋をするように置いてある。その際、3個の自然石を安定させるために石組みの内部や石の隙間に小礫を詰めている。

S K14 (第7図、図版3a) 墓壙下の北東部に位置し、S K1の上部構造の集石層上面で検出した。平面形は円形で規模は検出面で径約40cm、深さ約15cmである。墓壙から多量の火葬人骨と釘1本が出土した。火葬骨は残存状態が悪く、性別・年令は不明である。墓壙の周囲には10~15cm大の小礫がみられるが、S K1の集石の一部である可能性も考えられる。

V 遺 物

出土遺物には土器・陶磁器・銅製品・鉄製品・石器・人骨などがある。

土器類（第9図）

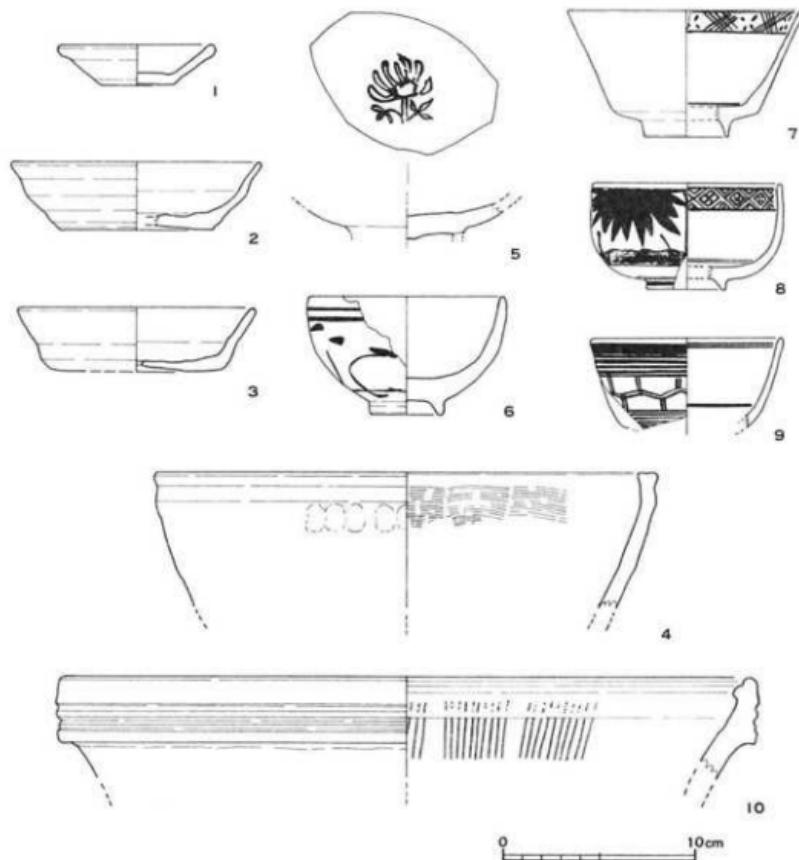
土師質土器（1～4）

土師質土器は約30点出土したが、小片のため器形を復元できるものは少ない。1はSK9から、2は暗茶褐色土層から、3・4は暗褐色混礫土層から出土した。1は小皿で、体部が外上方に直線的にのび、口縁端部はやや厚くなつて丸く終る。体部内外面は回転ナデで調整し、底部は回転糸切りの手法をとる。胎土は砂粒を殆ど含まず精良である。焼成はややあまく淡橙色を呈している。ほぼ完形、口径8.2cm、底径3.8cm、器高2.1cmである。2は杯で、底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反している。内外面ともに回転ナデで、底部は回転糸切りである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、淡茶褐色を呈している。 $\frac{1}{2}$ 残存、口径12.8cm、底径8.0cm、器高3.5cmである。3は杯で、体部から端部にかけてほぼ直線的にのびて終る。体部内外面は回転ナデによる調整を施し、底部内面は仕上げナデが施されている。底部はヘラ切りの後にナデしている。胎土は精良で、焼成は良好であり、淡黄褐色を呈している。 $\frac{1}{2}$ 残存、口径12.0cm、底径8.8cm、器高3.3cmである。4は鉢で、口縁端部は横ナデ、口縁部内面は横方向の刷毛目により調整されている。外面口縁部直下には指頭圧痕が見られる。胎土は比較的精良、焼成は良好で淡黄褐色を呈する。推定口径25.8cmである。

陶磁器（5～10）

陶磁器は約90点出土した。5はSK5から、6～10は暗褐色混礫土層から出土した。5は龍泉窯系の青磁碗である。断面は暗紫灰色で体部内外面には暗緑灰色釉が施されている。高台内部は無釉である。見込み中央には印花一枝文が施されている。6は唐津焼系の陶胎染付碗である。暗紫褐色の胎土で、外面下半は白化粧土を施している。内外に乳白色の釉を施す。体部外面には唐草文が描かれている。推定口径10.0cm、高台径3.6cm、器高6.1cmである。7は肥前系の染付青磁碗である。口縁部内面に四方擗文を描く。体部内面と高台内面に乳白色釉を施す。体部外面には暗緑灰色釉を施す。疊付は無釉である。推定口径12.0cm、高台径4.2cm、器高6.6cmである。8は肥前系の湯呑み碗と考えられる。外面に竹の模様、口縁部内面には四方擗文を描く。推定口径9.6cm、高台径4.0cm、器高9.6cmである。9は肥前系の碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。外面上位と下位には数条の横線文、中位には横線文に挟まれて亀甲つなぎ文が描かれている。推定

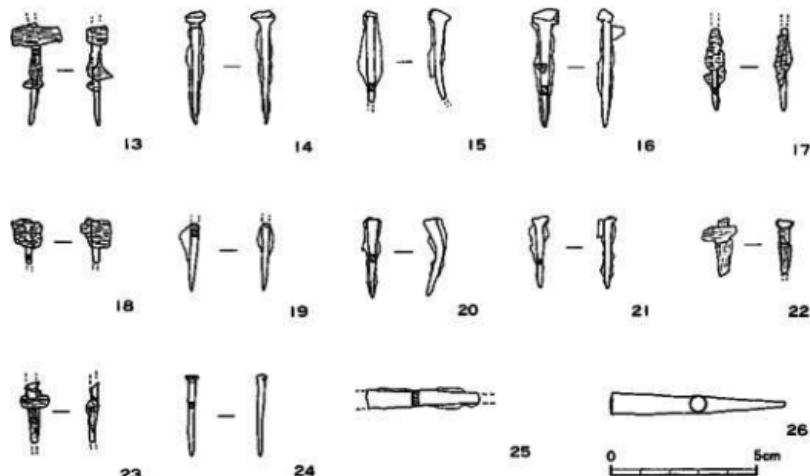
口径9.8cmである。10は備前焼の擂鉢である。口唇部が上下・内側に拡張している。口縁内面に1条、外面に2条の凹線を施している。体部内面には10条1単位の擂り目を刻んでいる。推定口径35.4cmである。5は明代の14世紀末～15世紀中頃のものと考えられる。その他の陶磁器はいずれも18世紀～19世紀後半に比定できる。



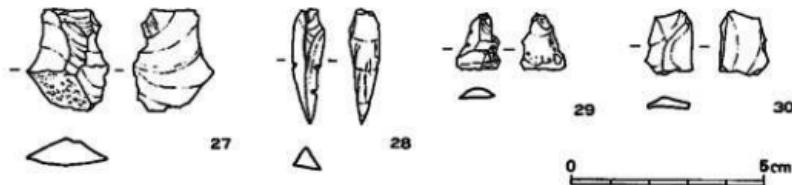
第9図 出土土器実測図（1：3）
(1はSK9, 2は暗茶褐色土層, 5はSK5, 3・4・6～10は暗褐色混疊土層)



第10図 出土銭拓影 (1 : 1, 11・12はSK13)



第11図 出土鉄器・銅製品実測図 (1 : 2)
(13-17はSK2, 18はSK3, 19-21はSK12, 22・23・25はSK13,
24はSK14, 26は暗褐色混疊土層)



第12図 出土石器実測図 (2 : 3)
(27は暗茶褐色土層, 28はSK3埋土, 29はSK2埋土, 30はSK14埋土)

銅製品（第10・11図）

古錢（11・12）

治平元宝と永樂通宝が各一枚ずつSK13から出土している。11は北宋の治平元宝（初鑄1064年）である。径2.40cm、穿の一辺は6mmをはかる。12は明代の永樂通宝（初鑄1408年）である。径2.45cm、穿の一辺6mmをはかる。

煙管（26）

26は暗褐色混疊土層中から出土した煙管の吸口である。長さ6.0cmの銅製品で合わせ目が確認できる。

鉄器類（第11図）

鉄釘（13～24）

鉄釘は約25本出土した。13～17はSK2、18はSK3、19～21はSK12、22・23はSK13、24はSK14より出土した。鉄釘の長さは2.8～4.0cmで、釘頭はほとんどが直角に折り曲げた折頭形である。釘身の断面形はいずれも方形である。

用途不明鉄製品（25）

25はSK13から出土した用途不明の鉄器である。現存長3.9cm、幅4～7mm、厚さ2.5～3mmである。

石器（第12図）

剝片（27～30）

27は暗茶褐色土層、28はSK3埋土、29はSK2埋土、30はSK14埋土から出土した。いずれも黒曜石であるが、27～29は漆黒色、30は乳白色を呈する。27は長さ2.6cm・幅2.1cm、厚さ0.7cmで背面に一部自然面が残る。28は長さ2.9cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmである。29は長さ1.9cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmである。4は長さ1.6cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmである。

VI まとめ

今回発掘調査を実施した郷古墓は、当初、中世の積石基壇と想定して調査を行ったが、積石基壇については、近世後期に構築されたと考えられ、基壇下から14基の土壙墓がいくつかの段階を経て造営されたことが明らかになった。以下、調査で明確になった事柄を整理するとともに若干の検討を加えてまとめとしたい。

土壙墓については、規模、形態、位置関係から大きく3グループに分けられる。第1グループは平面形が長方形または方形の大きいもの（長辺1.3～2.1m、短辺1.1～1.3m、深さ0.5m）—SK1～3・13、第2グループは平面形が長方形または橢円形で第1グループよりやや規模が小さいもの（長辺・長軸1.0m前後、短辺・短軸0.7m、深さ0.3～0.5m）—SK11・12、第3グループは平面形が円形または方形で規模が小さいもの（一辺・径0.4～0.6m、深さ0.2～0.4m）—SK4～10・14である。出土遺物や土壙の規模・形態からみて第1・2グループが木棺による土葬墓、第3グループのSK14は火葬墓と考えられる。

本遺跡の墓壙の配置には特徴がある。すなわち方形及び長方形の土壙墓（第1・2グループ）の主軸はほとんど北位を指し、その分布は古墓の北半に集中しているのに対して、円形と規模の小さい方形の土壙（第3グループ）の分布は散在的である。それぞれの墓壙がほとんど重複しないことは既存の墓壙の存在を意識して墓を構築したと考えられる。例を示せばSK13はSK3とSK5に後出するものであるが、他の墓壙となるべく切り合わせないように、なおかつ北半の西部に位置していることから墓壙の配置が何らかの意味をもつ可能性が推定される。

郷古墓の構成については、5つの段階を想定した。第Ⅰ期は、ほぼ基底面を掘り込んで埋葬施設を構築した時期で、SK1～3がこれにあたる。これらの土壙は平面形が大きい長方形や方形であり、木棺を埋置し、小礫や円礫が集石する上部構造を有する。第Ⅱ期は平面形が円形または方形であるSK4～10を構築した時期で、SK5のように墓標石をもつ土壙もあり茶褐色土層上から掘り込んである可能性が大きい。第Ⅲ期は、暗茶褐色土を盛土してSK11～13を構築した時期である。これらの土壙は平面形が隅丸長方形を示す。SK13は木棺を埋置したものと考えられ、上部構造には角礫で囲った方形の石組みを自然石で蓋をする状態の墓標石を有している。第Ⅳ期はSK14がつくられた時期である。平面形が円形の浅い火葬墓であることから第Ⅲ期とは時間的な隔たりや宗派による埋葬方法などの違いがあったと考えられる。そして第Ⅴ期は積石基壇が構築される時期で埋葬は行われなくなる。

年代については、遺構に伴う遺物が少量のため明確にしがたい。第Ⅱ期の構築はSK5出土の青磁やSK9出土の土師質土器から中世末期と考えられる。第Ⅴ期は暗褐色混疊土層から18世紀～19世紀の唐津焼系などの陶磁器が出土していることから江戸中期～末期に比定できる。このように本遺跡はおおまかに中世末期～近世末期まで断続的ではあるが、ある一定の空間内に墓が営まれたことが明確になった。埋葬方法は土葬墓から火葬墓へ推移していることは、糸井第2号古墓⁽¹⁾と共通しており、その画期もほぼ近世中期～後期に位置づけられる。しかしそれは当該地に限られるのか、その契機は何であったのかは明らかにできず、今後の資料の増加を待って検討したい。

ところで、郷古墓のある有原地区は中世後期には旗返山城を本拠とする江田氏の支配領域下となっており、南から勢力を拡大する敷名氏との境界地域として重要な位置を占めていた。『芸藩通志』によれば、郷古墓の北方約500mの丘陵上には江田氏の菩提寺といわれる長門寺が造営されており、現在、長門寺跡周辺には江田氏一族の墓と伝えられる五輪塔や宝篋印塔のほか、佐伯郡吉和村の妙音寺原遺跡の第9号墓⁽²⁾に類似する積石基壇や集石遺構が確認されている。このような地域に位置する本古墓は中世末期には既に構築が開始されていたと考えられる。そして、出土した遺物には、破片であるが明代龍泉窯系青磁や古銭などの他地域との交易を窺わせるものが出土していることから、本古墓の被葬者には江田氏と何らかの関係のある有力農民あるいは土着武士層の存在が想定されよう。

註

(1) 広島県立埋蔵文化財センター「糸井第2号古墓発掘調査報告」昭和59(1984)年

(2) 広島県教育委員会「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(4) 昭和58(1983)年



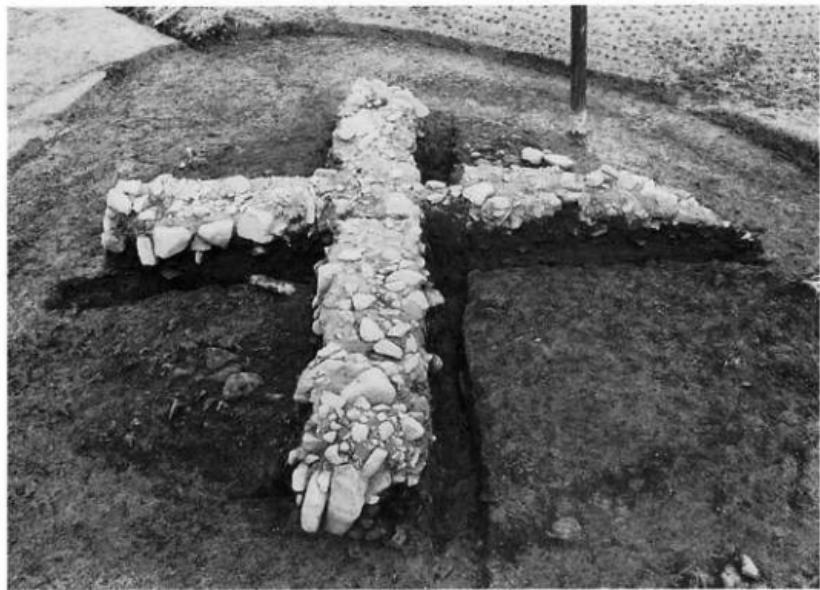
a 遺跡遠景（南東から）



b 遺跡近景（南西から）



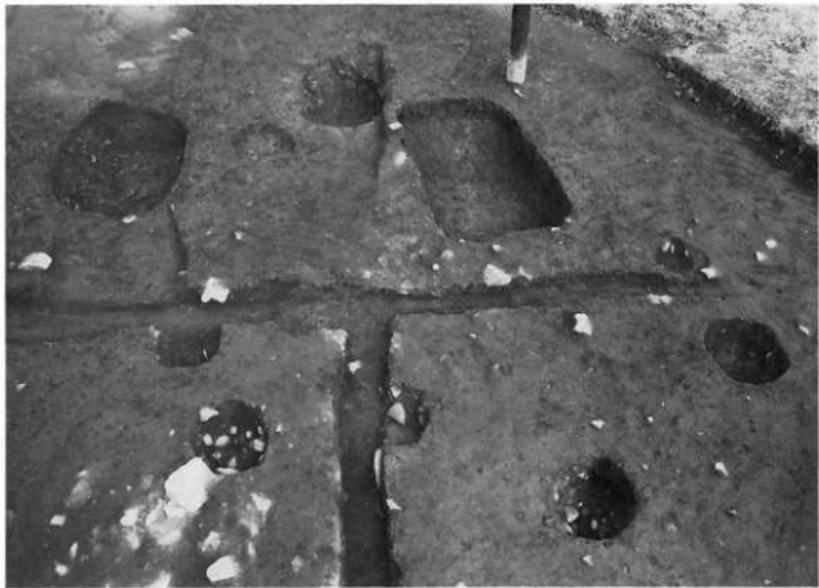
a 積石基壇全景（南西から）



b 積石基壇断面（南西から）



a SK11~14完掘状況（南から）



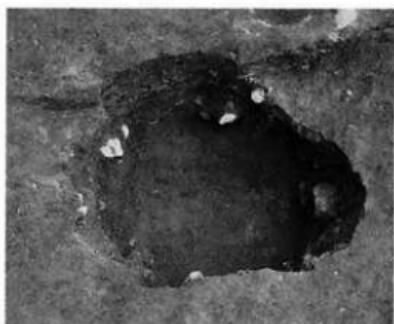
b 調査区完掘後全景（南西から）



a SK 1 検出状況（東から）



b SK 1 完掘状況（西から）



a SK 2 (北西から)



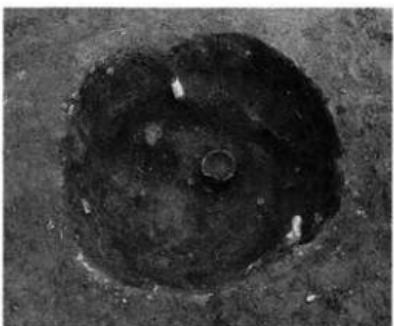
b SK 3 (北西から)



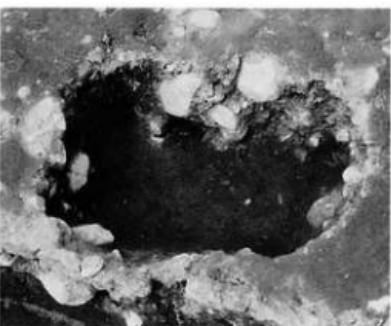
c SK 5 (西から)



d SK 6 (北西から)



e SK 9 (西から)



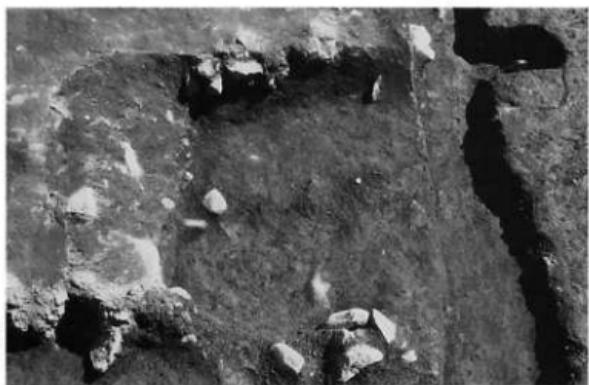
f SK 12 (東から)



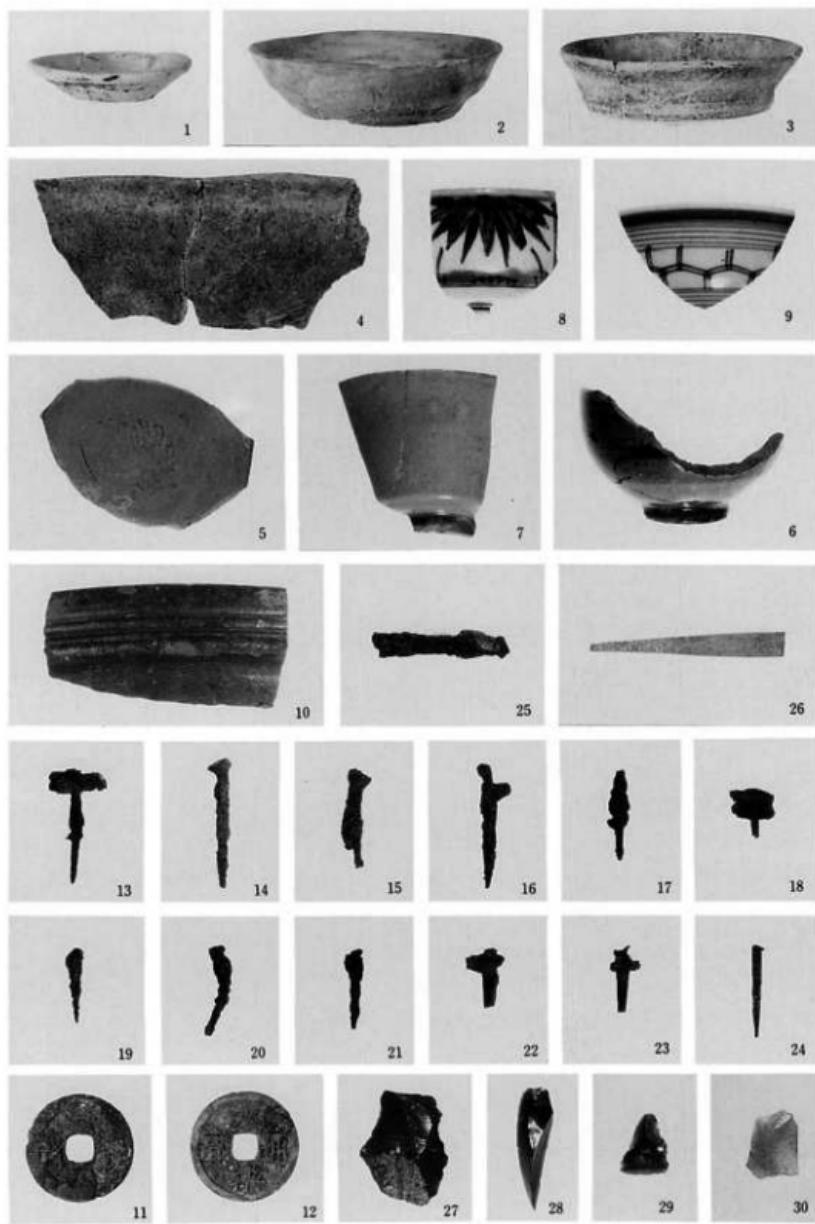
a S K13墓標石
(西から)



b S K13墓標石除去後
(西から)



c S K13完掘状況
(西から)



出土遺物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第77集

郷古墓発掘調査報告書

編集・発行
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733 広島市西区観音新町4丁目8-49

T E L (082) 295-5751

発 行 日

平成元(1989)年3月

印 刷 所

株式会社 中本本店印刷